2018年横浜ナザレン教会三位一体後第五主日礼拝
「愛すること」
コリント信徒への手紙Ⅰ12:31b～13:13、ルカ福音書 5:17～26

【聖書箇所】
① Ⅱコリント 12:31b～13:13
12:31b そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。 13:1 たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。2 たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえ、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。 3 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。 5 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。 6 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。 7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。 8 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、 9 わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。 10 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。 11 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。 12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。 13 それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。
② ルカ福音書 5:17～26
17 ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。 18 すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。 19 しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。 20 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。 21 ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒涜するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」　22 イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。 23『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。 24 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰

りなさい」と言われた。 25 その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。 26 人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

1　今月のテーマ

今月の伝道礼拝のテーマは「愛するということ」です。なぜこのテーマを選んだかというと、旧い友人とメールのやり取りを通じて、「私達は何の為に生きているか」という事を考えさせられたからです。「私達は何の為に生きているのか」聖書はどういっているのだろうか？という事に思いを巡らしていると、「**互いに愛し合いなさい**」という主イエスの言葉を思い出しました。そして「私達は、お互いに愛し合う為に、命を与えられているのではないか」という考えに至りました。今日は、聖書が語っている「愛するということ」はどういうことなのか、共に心を集めて、み言葉に聴いていきたいと思います。

2　こよなき愛

聖書は、愛をどうとらえているのでしょうか。具体的にまとまって記されているのが、今日の聖書、第一コリント書13章と言えます。よく知られたところで『愛の讃歌』とも呼ばれる箇所です。私は信仰を与えられた当初、ここを読むのが苦手でした。「私はこんな風には愛せない」と惨めな気持ちになり、筆者パウロから「キリスト者失格」の烙印を押されているように思えたからです。

しかし、それは誤解でした。パウロが歌っているこの素晴らしい愛は、人となりたる神の御子イエス・キリストその人の在り方なのだと気づかされたからです。先ほど、「馬槽の中に」というイエス様の生涯を描いた讃美歌を賛美しました。4番の歌詞には、「この人にぞ、こよなき愛は現れたる」とあります。“こよなき”は、”超ゆるものなき“から来ているという説もある少し古風な形容詞、“この上もなく”という意味です。この上もない愛がこの人に現れている…と歌っています。パウロがⅠコリント13章で歌い上げている愛です。

イエス・キリストは「馬槽の中に」の歌詞の通りの一生を過ごされました。そして、自分に不都合な人を嫌わざるを得ない、憎まざるを得ないという私達すべての人間の罪を、父なる神に償って死んだのです。十字架の上までも神と人を愛しぬいた方でありました。まさにコリントⅠ13章で歌い上げられているような愛に生きた人。このイエス・キリストに父なる神の愛が現れているのです。

3　私―あなたの関係

それはいったいどのようなものなのでしょうか。第一には、私達を「かけがえのない者」として受け止めて下さるという事です。代わりのきかない存在、なくてはならない者としてくださる―それがイエス・キリストに現れている愛です。

ある学者は、人と人との関係を呼び方の違いであらわしました。「別にこの人でなくてもいい。代わりの人がいる」という関係である時、それは、「私と彼、彼女の関係」という代名詞の関係だと言いました。この場合、相手は誰であるかは重要な意味を持たないからです。一方、「この人でなくてはならない。私にとってかけがえのない人だ」という関係を、「私―あなた」の関係としました。相手を「あなた」と呼び、その人である事が決定的に重要な意味を持つ関係、お互いに真剣に向き合う関係だというのです。

夫婦、親子、恋人、友人などは、「私とあなた」の関係にある人達でしょう。他の人では代わりがきかない、お互いにかけがえのない存在です。一方、買い物に行ったスーパーでレジをしてくれる面識のない人。その人は私にとっては、「彼、彼女」。別にその人でなくてもいいし、名前を知る必要もない。自分の買い物の清算をきちんとしてくれればそれでよいだけの関係です。

そして、神が私達人間に対して求めておられるのは、神との間に「わたし―あなた」の関係を持つ事なのです。神は、私達一人一人をかけがえのない存在として愛してくださるから、私達も神をかけがえのない存在として愛してほしいと望んでいます。今日の礼拝の招きの言葉であるイザヤ書43:1節「**ヤコブよ、あなたを創造された主は／イスラエルよ、あなたを造られた主は／今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ。**」とある通りです。

「**わたしはあなたの名を呼ぶ**」―聖書が書かれた古代世界では、名前はその人の全存在を指していました。私にとって「あなた」はただ一人しかいない、私はかけがえのないあなたを呼び求める、あなたをかけがえのない尊い者と考えるから、私のもとに帰って来なさい…と神は私達一人一人に呼びかけておられます。

4　自分の事とする

そして、イエス・キリストに現れた父なる神の愛は、私達の痛みや苦しみをご自分の痛み・苦しみ、悲しみとされる…と聖書は語ります。パウロはこの事を次のように述べています。「**わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。**」(ローマ書8:26後半)。

ここでいう“霊”とは、神の霊です。主イエスが十字架にかかり全ての人の罪を肩代わりして死に、父なる神に償って下さったこと、三日目に甦り、父なる神の御許に帰っていかれた、そのイエス様と入れ替わりに聖霊が私達の所にやってきて、イエス様を信じる者の内に宿ってくださっている…というのが、先ほどご一緒に使徒信条を使って告白した教会の信仰です。イエス様の代わりにやってきた聖霊とは、目に見えないイエス・キリストといえます。この聖霊は、私達の言葉にならない痛みや苦しみなどを自分の痛み・苦しみとして、うめき声をあげて痛み苦しみつつ、父なる神にとりなしてくださる…というのです。

しかし、それは人間の不正も悪も受け入れる…というのではありません。神は正しい方ですから、それはできない。だからこそ、主イエスは、何よりも私達の罪を他人事とはせず、ご自分のものとしてくださったのです。それは先ほどの280番の讃美歌のように、強引に十字架の杭の上に押さえつけられ、手足に釘付けにされているその時にさえ、自分を殺そうとするローマ兵に対して、「**父よ、彼らの罪をお許し下さい。自分達が何をしているのか知らないのです**」と執り成しの祈りをした事によく現れています。主は、自分を殺す者達の罪をもご自分の罪として引き受け、十字架の上に体を引き裂かれながら死んでくださいました。

私は、このように私達一人一人を愛してくださる方を知りません。確かに私には、私を愛し大切に思ってくれている友人や家族がいます。皆さんもそうでしょう。しかし、私の罪も含めて全存在を引き受けるほどの愛は人間の愛ではありません。人の愛とは異なる神の愛は、十字架のイエス・キリストのもとにある…と言えます。

5　中風の男

ですが、神は私達人間の内にあるものを蔑ろにはなさいません。その様子がルカによる福音書5:17節から26節に描かれています。中風の男を主イエスの所に連れて来た男達の愛です。彼らはお金で雇われた人達ではなかったと考えられています。中風の人が寝ていた「床」というのは、当時の貧しい人々が使う粗末な寝床、人を雇うようなお金持ちが使うものではないからです。中風の男を運んできた男達は彼の親族か友人、彼と親しい人だったのです。中風で動けない、働けない貧しい男の状況を見る度に心を痛めた者達。彼らはイエス様の評判を聞いたのでしょう。ひょっとしたら、彼らの中には、今日の箇所の直前、主イエスが重い皮膚病の男を癒す場面を見ていたのかもしれません。「神しか治せない」と言われていた重く悲惨な皮膚病。決して近づいてはならない「汚れた者」として徹底的に差別されていた皮膚病患者に手を伸ばして癒されたイエス様の慈しみ深さを知った男達。「イエス様なら中風の男を癒してくれるかもしれない」と、愛する中風患者を床ごと担いで、イエス様が滞在している家の前まで運んできたのでした。しかし、そこには戸口からあふれ出すほどの群衆がいました。人々は主イエスの教えに熱心に耳を傾けており、中風の男には目をくれようともしません。常識的に考えれば、「今は無理だから、後で来よう」と一旦連れて帰るとか、群衆が帰るのを待つものでしょう。ですが、この男達は違いました。なんと他人の家の屋根に中風の男を連れて上り、屋根をはがし始めたのです。当時の中近東の家の屋根のつくりはとても簡素なものだったそうで、毎年雨の季節が始まる前には必ず屋根の修理をしたそうです。その為に屋根に上る非常階段が家の外にありました。男達はこの階段を使いました。それにしても屋根を破るとは大胆な行動です。なんとしてでもこの男を救って頂きたい…一途な思いをもってイエス様の前に中風の男を吊り下げたのです。イエス様の所に飛び込んでいったのです。

6　信仰を見出すキリスト

主イエスは、この男達の中に「信仰を見た」とあります。この「見る」というのは、「理解する」という意味がある言葉です。主は彼らの中風の男に対する愛とご自身への信頼を見てくださった、理解してくださった。この事は実に味わい深いものがあります。

全く愛情のない人間は殆どいないでしょう。基本的に私達は人を憎むよりは愛したい…と生きている。しかし、私達の愛は儚いのです。困難な状況になれば、愛もまた消えてしまう事になるだろうし、頓挫してしまう。消えてしまわなくても、方向を間違ったりする事はしょっちゅうあります。相手を愛するあまりに間違った事をしてしまう、そういう事を私達はよくします。

私達は、主イエスを全然信頼していないという事はないでしょう。「主イエスが生きる上で力になる何かよい事を教えてくださるのではないか」と期待して礼拝に参加しているのですから。でも、主イエスがどんな問題を解決してくださる…と信じ切っているかというと怪しいものです。私達の主イエスへの信頼は、主イエスの私達への愛に比べれば、けし粒のようなものです。

しかし、主イエスはこの小さく脆く限定的な私達の愛と信頼を決して否定されません。それどころか、大いに喜んでくださるのです。私達の不完全な愛と信頼に、神への信仰を、私達が神を愛する者へと成長する可能性を見出してくださいます。そして、私達の小さく脆い愛と信頼を、強く確かなものとして主イエスが支え、導き、成長させてくださいます。

7　ファリサイ派と律法学者

中風の男を連れて来た者達とは正反対の人々が主イエスの傍らにいました。主イエスの評判を聞きつけて方々から集まった律法学者やファリサイ派の人々です。彼らは「急速に民衆の支持を集めているイエスという男がどんな者なのか見てやろう」と、イエス様の品定めに来ていました。彼らは、主イエスの所へ連れて来られる病んでいる人々、悩んでいる人々への愛や同情はなかったようです。そして、イエス様が中風の男に対して「あなたの罪は赦された」と仰ったとき、彼らは心の中で呟きます。「神を冒涜するこの男はなにものか、罪をただ神のほかに、いったい誰が、罪を赦す事ができるだろうか。」と。

彼らは主イエスに対して「どうしてそのような事を仰るのでしょうか」と質問するのでもありません。主イエスと向き合おうとはしないのです。主イエスと「わたし―あなた」の関係を結ぼうとはしない。イエス様のそば近くにいても、心では遠く離れて、「この男はなんという罪深い男だ」とイエス様を裁き、糾弾しています。彼らにとっては中風の男が癒されるかどうかよりも、自分達の正義が大切であったのです。そうして、虚しく主イエスの傍らにいました。パウロが「愛がなければ全てが空しい」と言っている姿があります。中風の男を連れて来た男達とは対照的です。

8　大人になるとは？

さて、そんなファリサイ派や律法学者達の仲間だった男がいます。それが先ほど見た第一コリント書を書いたパウロです。彼は、若い時、とても熱心なファリサイ派だったのです。パウロは神の掟を完璧に守るという、自分の行動で神に「正しい者」とされる事を目的として生きていました。しかし、その彼が自分の為に十字架についてくださったイエス・キリストを知ります。自分の正義ばかり追い求めていた罪深い自分自身を深く深く憐れみ、御許に招き愛する神の愛をイエス・キリストを通じて知りました。

そしてパウロは、イエス・キリストを宣べ伝える者となりました。彼は方々に多くの教会を建てました。教会を立ち上げては信頼できる人に任せて、パウロ自身は他の地への伝道へと旅立ちます。

しかし、パウロがいなくなると、できたばかりの教会に問題が噴出します。コリント信徒への手紙Ｉの宛先であるコリント教会もそうです。お金持ちで社会的地位の高い信徒達が、貧しく社会的地位の低い人々を差別するという教会ではあってはならない事がまかり通っていました。パウロはコリント教会の現状を深く憂い、「イエス・キリストを信じる教会はそうであってはならない！」と教え諭すの手紙を書きました。それが、コリント信徒への手紙です。このパウロに反発したのか、コリント教会には彼を貶める人々も出てまいりました。パウロは深く傷つきますが、しかし、彼らも含めてコリント教会の一人一人への深い愛をもって必死でイエス・キリストを取り次いでいます。「涙ながらに手紙を書きました」とさえ記しているほどです。今日の愛の讃歌もそうです。コリント教会に向けて、「キリストの体である教会に不可欠なイエス・キリストの愛」を歌っているのです。

パウロはこのように、自分の正義のみを求める若者から、自分を嫌う者をも愛し諭し導く者へと成長しました。キリストの愛を抱く者となったのです。それが、「**幼子だった時、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた**」という言葉ではないでしょうか。キリストの側に立つ者と成長したと言ってもいいでしょう。

キリストの側に立つ…というと、「キリストの愛が人間のうちにあるわけないじゃないか」と思われる方もいるでしょう。私もかつてはそう思っていました。人間がキリストの愛に生きる事はできないのに、“キリストの愛に生きる”とか軽々しく言うのは傲慢だ…と。それも一面事実に違いありません。

しかし、人間の限界を最もよく知っておられた主イエスが、ご自身が弟子たちに次のように仰っている事を忘れてはいけません。「**あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。**」（ヨハネ福音書 13:34）と。イエス様はこの言葉を、十字架に渡される前の晩、この世に残していく頼りない弟子たちへの告別の言葉として与えているのです。主イエスのこよなき愛の詰まった言葉です。願いです。それは、キリストの弟子として、キリストの愛に生かされた者として、師であるキリストに倣い神と人を愛していきなさい…という主の切なる招き、私達への願いなのです。

だが、しかし、キリストの愛に倣う事は、私達人間の力で到底できる事ではありません。神の子の霊、見えないイエス・キリストが私達一人一人の内に住んでくださっているからこそ、できるのです。それ以外にはありえません。パウロは別の所でこう言っています。「**生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。**」（ガラテヤ書２：20）

イエス・キリストの霊が私達の内に生きて働いてくださるからこそ、自分にはないキリストの愛を生きる事ができるのです。自分に嫌な事を言う人間を嫌わざるを得ない、愛せないという私達の限界を神の御子の霊が超えてくださるのです。人を愛せない不自由な状態から、人を愛する事ができる自由へと解き放ってくださいます。

そんな神の子の霊によって自由にされた人にマザーテレサがいます。私が「はっ」とさせられたマザーテレサの言葉があります。「**人は不合理、非論理、利己的です。気にすることなく人を愛しなさい**。」という言葉です。不合理で、利己的な人々を嫌い、遠ざけるのが私達の自然な姿です。このような人間を愛する事は私達を超えた事です。しかし、キリストから見れば私達人間はみなそうです。私達の欠点を主イエスはものともなさらずに身をささげて愛してくださいました。そのお方が私達の内には生きてくださっています。だから、自分や相手の欠点に囚われずに、キリストに愛された者として、人を愛しなさい…と言っているかのようです。キリストによって人を愛せない不自由さから解き放たれて、人を愛する自由の内でのびのびと生きる命喜びが聞こえてきます。

9　礼拝

そうは言っても私達はマザーテレサではありません。私達の周りを取り巻くこの世は、「神と自分と人を愛する事が生きる事の目的」という世界ではありません。もっと明確な結果を望む世界です。愛なんてもので飯が食えるか…と目先の利益ばかり求める会社の上司や同僚もいるでしょう。家族だって色々。どんなに愛を注いでも受け取り方は千差万別、誤解される事もある。葛藤や軋轢も出て来るし、悩みは尽きません。苦しみます。時にはイエス様を見失い、罪を犯します。

だからこそ、私達は週の初めの日曜日、こうして神を礼拝するのです。時には、この世との戦い、自分との戦いに敗れて、惨めな敗残兵のような気持ちで礼拝に集う事もあるでしょう。私はそういう事がしょっちゅうです。しかし、礼拝で私達は聞きます。「あなたは、神がその独り子イエス・キリストを犠牲にする程に愛している者であり、御子イエス・キリストがあなたの内に住んでくださっている者だ」と。そして、神に愛された者として、この世で生きていく歩みを新たに始める事ができます。確かに私自身は弱く罪深く神も人も自分も十分には愛せない、だけど、私の内に住んでくださるイエス様は違う」。このイエス様に働いて頂ける喜びを感じながら、毎週新たに神と人を愛する道を歩み始めます。それは、命ある限り続く道、内なるイエス・キリストと共に歩く喜びの道。このような道を備えてくださった父なる神に深く感謝します。